

夏花火

朗読：日野花江 台本：久遠真雪

夜が、波打つ海のように頬を照らして。
夏休みが終わる。もうすぐ。
楽しいのに、あっという間に過ぎる今日までの日々は、
青空をソーダ水で割るみたいに弾けて。

小さな火が、物語を乗せ、終わる。
明日に届く前に夢を落とす光。
それでも、大人になっても、思い出を揺らす火はすぐそばにあって。
例えば、マッチ箱を開いて、両手からぬくもりを灯すように。
きっと、会いたいときにこの夜を広げられる気がした。

からっと渴いた喉。
チリチリ溶けていった花火の影。
夏の、温度と一緒に。